

草薙ゼミナール

2002 年度 卒業論文集
(上巻・下巻)

2003 年 3 月

大阪経済大学 経営情報学部

経営情報学科

指導教員：草薙 信照

草薙ゼミナール 2002年度 卒業論文集 (上巻)

【目 次】

指導教員	草薙 信照	2002年度卒業論文集の刊行に寄せて
995001	赤井 道徳	イマジネーションで変化する音楽 ～ Graffiti of Music ～
995047	武村 貴仁	コンビニの発展とフランチャイズチェーンの問題点
995068	播磨 寛子	仮想空間を利用したグループコミュニケーションウェア ～3Dチャットの現状とその将来性～
995069	樋上 敬哉	マルチメディア入出力装置とその将来性
995077	宮本 暁子	3D アニメーション作品 「ヨドちゃんの川流れ」
995100	浅田 真	スポーツ振興くじの現状と課題 ～スポーツ文化振興のために～
995101	浅田 智弘	IT 革命による物流への影響
995108	磯田 勝	「現代疲労＝ストレス」の回復方法
995120	大野 慎二	流通業界で急成長する100YEN ショップの戦略に関する研究
995128	小山 高志	IT 革命がもたらす自然環境への影響
995297	仲谷 直樹	IT によるカーライフスタイルの変化と交通事故
995299	永井 元太	仮想空間を利用したグループコミュニケーションウェア ～Macromedia Director8.5 による 3D チャットシステムの構築～
995309	原井 千春	日本におけるコーポレート・ガバナンスのあり方
995317	前田 篤秀	仮想空間を利用したグループコミュニケーションウェア ～Macromedia Flash5J を使用したインタフェースの設計・制作～
995326	宮本 佳絵	マーケティングとカラーコーディネート
995346	小北 武	仮想空間を利用したグループコミュニケーションウェア ～テスト計画の策定・実施・評価～

草薙ゼミナール 2002年度 卒業論文集 (下巻)

【目 次】

指導教員 草薙 信照 2002年度卒業論文集の刊行に寄せて

- | | | |
|--------|--------|--|
| 995012 | 上野 貴正 | ITS(高度道路交通システム)の展開と課題について |
| 995094 | 吉田 祥太 | 電子透かしの動向 ～個人レベルでの普及に必要なもの～ |
| 995107 | 石村 和佳奈 | 情報化社会とマイナスイオンに関する考察 |
| 995122 | 大藪 祥子 | 広告・キャッチコピーの魅力 |
| 995127 | 小野 吉道 | これからの道路交通における ITS の役割 |
| 995130 | 垣内 絵美 | 食生活の変化とアレルギーについて |
| 995155 | 塩田 靖央 | インターネットの匿名性に関する考察 |
| 995157 | 杉江 美穂 | 紫外線が人体に及ぼす影響について |
| 995164 | 田中 千智 | 余暇意識から見たライフスタイルの変化 |
| 995166 | 棚原 盛之 | TOYOTA 自動車の G-BOOK 戦略に関する研究 |
| 995187 | 仲山 隆継 | ケータイユーザーの実態について |
| 995192 | 西森 あゆみ | 国内大規模テーマパークの経営戦略 |
| 995193 | 野々村 典美 | 狂牛病が酪農経営に及ぼす影響 |
| 995242 | 赤沢 太悟 | ヒーリングミュージックと音楽療法に関する考察 |
| 995272 | 木村 知世 | 奈良県の人口増減に関する考察 |
| 995323 | 宮崎 令子 | VHSとDVDレコーダの比較 |
| 015953 | 村上 陽子 | 虐待と猥の境界線に関する考察 |
| 015954 | 中村 崇 | 仮想空間を利用したグループコミュニケーションウェア
～データベースシステムの構築及び管理ツールの制作～ |

「2002年度卒業論文集の刊行に寄せて」

2003年3月

指導教員 草薙 信照

草薙ゼミの第5期生となる諸君は、〃経営情報学部・経営情報学科、の第3期生、そして2003年度に米国留学を控えている私にとっては、ある意味で〃最後のゼミ、でもあった。

「インターネットを利用した応用情報システムの研究」という看板を掲げて募集したところ、40名を超える応募をいただき、〃最後のゼミ、ということもあって33名を選抜した（その後、編入生2名を加え、1名を除籍したので最終的に34名になった）のだが、前年度にも2ゼミ・37名を選抜していたので、最大時には70名を超えるゼミ生をかかえていたことになる。

2ゼミ運営が大仕事であることは前年度の経験でわかっていたつもりだが、「本当にしんどかった」というのが正直な感想で、二度と2ゼミは持つまいと心に誓っている。なぜなら・・・ゼミ合宿ともなればバス1台分に相当する大移動、個別指導に1人あたり20分としても10時間、就職指導や卒業研究の指導にいたっては1人に1時間はかかるので30時間以上・・・しかし今となってはそれも良い思い出であって、多くの学生に接することができたという充実感がある。その一方で、学生一人ひとりに割ける時間が少なくなり、親密な対話や細かい配慮ができなくなってしまったことが残念でならない、これこそが2ゼミを持ちたくないことの最大の理由である。

さて、卒業論文の総評である。並んだテーマを見渡してもわかるように、ゼミ生諸君の関心は、上記の「インターネットを利用した・・・」という看板とは程遠い多方面の領域に広がっており、この傾向は年々拡大しているように思える。「ゼミとしての統一性がない」という批判もあるだろうが、私としては、なによりもまず本人に強い関心を持って取り組んでもらいたいと願い、その結果として、諸君も辛い作業に耐え時には涙を流しながらも、なんとか完成にこぎつけられたのだらうと考えている。そして、このような多岐にわたるテーマについて諸君と一緒に考え議論する機会を得られたことは、私にとっても貴重な経験であった。

毎年、完成した後だからこそ言うことであるが、卒業論文の意義として私がもっとも重要だと考えることは、諸君にとって、1つのテーマについてこれほど真剣に取り組んで研究することは、おそらく初めての貴重な経験となったであろう、という点である。したがって、一生懸命になって取り組んだという姿勢が伝わってくれば、たとえその論文が考えていたことの半分しか言い表せていなくても、あるいは参考文献からの引用の寄せ集めであったとしても、何物にも替え難い貴重な宝物であると言ってあげたい。もちろん、反省すべき点があるとすれば、それは本人が一番よくわかっているはずである。したがって個々の論文の評価は、研究者本人である諸君、そして読者の方々に委ねたいと思う。

大学生活4年間の集大成として、卒業研究という大仕事にやり遂げたという経験は、必ずや社会人になって仕事をする際の自信につながるだろう。そして10年後あるいは20年後になれば、良き思い出として懐かしく鮮やかによみがえるに違いない。

今後は同じ社会人として対等に、あるいは逆に私を導いてくれるようなつきあいをしていけるならば、教師としてこれにまさる幸せはない。今後の諸君の健闘を期待する。